

ふなやぶ、風、

第112号 (2015年9月)

風に吹かれて (90)

白井啓治

『移ろう時に身を任せ今日の命を愉しむ』

8月の中旬からお猫様の「耳ちゃん」が、軽い熱中症にかかり点滴を数回打ったが、20日過ぎに容体が急変。検査すると肝機能、腎機能が不全状態。高齢なので最期を迎えるかなと覚悟する。点滴を続けるが、容体の変化なし。病院へ連れて行くのも辛そうなので、延命処置を止める。

静に寝かせていると、苦しむ様子もないので、経口保水液をスポイトで与えながら自然に任せた。お猫様に分かるわけのないだろうが「頑張らなくていいよ、静に時を愉しみな」と声をかけ、自分自身に納得を与える。

8月27日午前9時20分、小生の膝に抱かれ息を引き取る。

小生とは13年間暮らしをつくってきた。耳ちゃんが我が家に保護され、家族にならなかつたら、この会報「ふるさと風」もなかつただろう。

耳ちゃんが家族になったことで、この地の風景、伝説などをモチーフとした物語を書き始めることとなった。

この地をモチーフとした物語を書き始めたことで、町おこしのための物語教室の講師を受けるこ

とになり、打田兄、兼平姉というかけがいのない友を得た。そして腰掛だったこの地を終の場所にしてしまったのである。因みに耳ちゃんがヒントになって書き下ろしたのが「新説柏原池物語」であった。その後「新鈴ヶ池物語」を書き起こし、朗読舞女優小林幸枝との出会いがあり、常世の国の恋物語百へ挑戦する事になった。

小生にとつて、お猫様 雌の耳ちゃんとの縁は、当に「異なるもの味なもの」となった。

「鶏口となるも牛後となる勿れ」

こんな言葉を知る人はもう居なくなってしまったのだろうか。居ても若者達にそう説教を垂れる人は居ないのだろうか。小生に於いては、この言葉は少なからず影響をもらった。だから、大学を卒業して大会社に就職し、…等の発想は一度も持たなかつた。吉川英治の宮本武蔵ではないが、「我以外皆師」をモットーに脚本も演出も誰にも師事しなかつた。そんなツツパリが良いとは言わないが、牛後の発想しか持てないのでは明日の希望を創造することは難しいだろうと思う。

牛後の志向は国政に於いても大きくみられるのは、嘆きを通り越して絶望を思ってしまう。敗戦国日本の誇るべき鶏口たる戦争放棄の憲法を、牛後に隠れて人殺しを容認しようとしているのか

ら、もはや絶望としか言いようがないだろう。

武力の脅威を持つて得られる平和は理論上ありえない。地球の歴史から見れば、人類の歴史なんて僅か過ぎるもので、発達の途上といえはその通りであろう。しかし、あるべき姿を見据えないで、牛であることを誇示したり、牛後に隠れての発展途上では、いずれ人類の滅亡は遠くない日にやって来るだろう。

現場力

菅原茂美

いかなる世界も、その基盤がしっかりしていないと、その上の構築物なり組織の運営等は、砂上の楼閣に過ぎない。底辺や基礎工事を手抜きすると、さほどでもない事件や地震・台風などにより、ぐらつき安定性に欠ける。千年も持つ木造建築の荘厳な神社仏閣は、正に日本伝来の宮大工による「現場力」の結晶と言えよう。

しかし世の中にはその逆もある。現場がどんなにしっかりしていても、経営のトップが不正経理を強要し、現場を攪乱させると世間の信用を失う。要は一体性である。現場と経営者が一心同体で、頭から足の先まで、背筋がピンとしていれば、健全な経営体として世に通用する。

日本のコメ作り現場力は、正に超一流。二千年の歴史があり、品種改良・灌漑・病虫害対策・播種・収穫までの合理的な耕作。精米・販売体系など、長年の技術の積み重ねで、世界に類を見ない優れた現場力を備えている。「米」という字は、十八の手がかかるといふほど、現場力を要する産

物である。その米の生産に日本は命をかけてきた。しかしそれが近年、グローバル化の波とやらが押し寄せてきて、関税抜きの貿易自由化を迫られ、青息吐息である。

グローバル化により、世界が統一したルールで、貿易を自由化したのだから、むしろ競争力の激化を招き、文明進化の道のりというより、経済戦争への危険性を増す。場合によっては、本物の戦争への導火線にさえなりうる。経済発展の強力な国が、基盤の進んでいない国に対し、強圧的に余剰生産物を押し付ける一方的な貿易は、世界の平和を乱すのみである。

*

物造りの「現場力」。これが日本の生命線である。工業生産の物造りばかりではなく、医療・教育・芸術など、あらゆる面でその基礎現場が、いかに充実しているか？ いかに体制が整えられているか？ 国力の評価は、この一点にある。

体制整備とは、単なる効率的・費用対効果の話ではなく、生産現場の人々が、過剰な労苦を背負わされる事なく、楽しみながら、いかに生き甲斐を持つて活動できるかにかかっている。

号令による強制増産や、ある目的のため、あらゆる「自由」を犠牲にして、闇雲に突っ走る体制整備では、かつての日本と同じで、軍国主義の「地獄絵」である。そんな体制整備は永続などするわけがない。そして決してあってはならない事だ。

過剰生産は、向こう見ずの「欲望特急列車」だ。機械化・合理化で過剰生産すれば、国内消費を超えるので、当然海外輸出……という構図となる。力による自由貿易の強化は、売る方は豊かになっても買わされる方は、多大の犠牲を強いられ、失業

者が多数出て、政治不安をもたらす。そんなのは、自由貿易とは言わない。

「自由」とは、双方が平等・対等であることが原則で、一方のみが自由というのは、「我儘・勝手」に過ぎず、小は、かかあ天下や亭主関白。そして地域紛争から、大は国家間の戦争にまで繋がる。

*

TPP問題 独善と偏見と言われようが、これだけは言わしてもらいたい。御存じ、TPP（環太平洋経済連携協定）交渉を見ると、日米の対等外交など、どこにも存在しない。戦後70年経っても、いまだに戦勝国と敗戦国の延長線上にある。

戦後学校給食に、米ばかり食べているとバカになる。パンを食べる！という事でアメリカの余剰農産物である小麦を無理やり買われ、日本で殆ど生産されなくなった。更に家畜の餌の大豆やトイモロコシは、今でもその殆どを輸入に頼っている。主食のコメを除いて大方を輸入に頼り、日本の食糧自給率は39%。こんな惨めな先進国など、世界のどこにも存在しない。今度のTPPは、主食のほぼ1割を、既に無関税で輸入を義務づけられているのに、更に特別枠としてアメリカから輸入を迫られている。餌の殆どを輸入させられているのに、更に肉や乳製品をもっと輸入しろ！というわけだ。食糧を外国に押さえつけられるという事は、国家の主権を他国に握られているという事だ。日本を苛めるなら兵糧攻め。首根っこを抑えられればなしの独立国など、惨めで仕様がなない。慢性化・平和ボケの未来は真に危険だ。

日本人の主食であるコメは、長年生産調整に多額の費用を投じ、14年は生産量790万トンであるが、「自由貿易」とやらは、その根幹を脅かす。他国

の余剰農産物を、何が何でも買わねばならない理屈が、私にはどうしても納得がいかない。

アメリカには、日本の「車」への報復の意味もあるかも知れないが、世界貿易機関（WTO）のルールに基づき、日本は米が余っているというのに主食用米を既にミニマムアクセス米（MA米）として、年間77万トンは、無関税で輸入を義務付けられている。しかも発展途上国を助けるためと言うのなら話も分かるが、その47%に当たる36万トンは、豊かなアメリカから輸入を義務付けられている。

ところが、この原稿が活字になる頃は、恐らくTPP交渉の妥結によりMA米の他に、更に加えてアメリカの特別枠として、毎年10万トンを無関税で輸入しなければならぬ事になりそうである。核の傘かどうか知らないが、近隣国の脅威から守つてやっているという意識が根底に働いているに違いない。日本が経済大国になれたのは、軍事費が少ないからで、多少はアメリカの言う事を聞け！という事なのか？

自国の政治基盤を安定させるために、相手国はどんなに泣こうと、国際的倫理など、どうでもよいのか？ アメリカは、中国の横暴を非難するけれど、その資格ありと言えるのか？

私は知識不足からか、アメリカのコメなどおしいくはないだろう。国内で競争入札する時、誰もアメリカ産のコメを買わなければ、どんなに押しつけられても、いつかはこの制度は崩壊するに違いないと思っていたら、なんとそれを心配するアメリカは、「政府調達」という制度をこのTPP交渉にキチンと盛り込んでいると言う。入札で人気がなくても、日本政府が責任を持って買い入れなければならないシステムを織り込んでいるという

のだ。どこまで腹黒い悪智慧か。

戦後70年も経った。日本はいつまでも敗戦国の従属的態度は捨て、はつきり言うべき事は言って、真から対等の友好国として、自己主張は通すべきである。国家の主権を維持するに足る食糧自給率は、最低でも80%を維持すべきである。

アメリカの高压的主張に、首席交渉官や、甘利TPP担当相の「はらわた」が煮えかえるような、我慢を押し殺しての交渉は、想像するだけでも地獄絵だ。私の見が狭いのか、日米両国の現場がTPP反対のデモを双方（アメリカは自動車部品、日本は農産物）で繰り返しているのに、なぜ急いでこんな交渉を成立させなければならぬのか。グローバル化とは、双方が対等に利益を享受できてこそ、価値のある話であろう。

現在私が関係している畜産生産現場では、TPPのために将来に希望が持たず、廃業していく例が非常に多い。牛も豚も飼育者は多数やめていく。家庭用バター不足で、緊急輸入などしているが、次々こんな問題が続発する事だろう。すでに多くの失業者が増えている。国産の安全な乳肉卵が手に入らなくなっても、強欲なアメリカの余剰農産物を、仕方なく買い続けなければならないのか。

安倍総理の訪米歓迎の裏庭には、TPPや集团的自衛権などの猛獣が大きな口を開けて待っている。生産現場の国民は戦々恐々である。

更に言わしてもらえば、米国の内心は、世界の至る所で、戦争や紛争が起きる事を大歓迎。なぜなら、米国は余剰農産物と同様、旧式の武器を売りつける算段があるからだ。武器産業で潤っている国民がどれほどいるか知れない。コンビニの数より銃の販売店の方が多し国なのだ。私が駐留し

た中米のある国では、国民が喰うや喰わずの最貧国なのに、米国産の古い型の戦闘機が、毎日ブン空を飛んでいた。これが世界の实情である。

ノーベル財団は「核兵器を減らそう」とオバマ大統領が唱えた瞬間、直ちに平和賞を授与した。建前は大変立派である。確かに米国は2015年、核弾頭を前年度より40発、英国は10発減らし、ロシアは500発減らしたが、唯一、中国は10発を増加した。大量殺戮兵器を、コソコソと増やし続けているのが中国である。それにしても米国は、武器産業の人口を養うため、世界が平和になる事など決して望んではいないように見える。表立っては世界平和を唱えるが、程良い緊張感で兵器が売れる事を内心期待している。そういう日米関係において、日本は永遠に敗戦国の隷属を強いられ、核の傘を恩に着せられ、今後どうやって生きていけばよいのか。

しつこいようだが、農産物の輸入拡大は、発展途上国の産業育成のため、近隣の東南アジアからというのなら、話は分かる。それが、大規模化して大量生産した先進国の余剰農産物を、何が何でも買わされるTPPの仕組み。品質の良い日本の自動車に押されている腹いせなのか。

日本の農業人口は一気に減少した。農業をやりたいくても安い生産費の国々と太刀打ちできない。農産品は、安いものを買えばよいというものではない。車を売って食糧を買え！それは筋が違う。農業は自然環境や水源を保全し、緑は温暖化を防ぎ、地球全体の安定に貢献する事、大なのである。それを見越した中国は、将来、真水の価値が高くなるを見越して、北海道の森林地帯を買い漁っている。しつかり法整備をしないと、首根っこを狙

われる事になりかねない。

それゆえ、国土保全のため、力を入れて農業を保護する国策は自然の理である。それを、国家が農業を保護するから輸入が制限されるので、国庫補助は直ちに廃止するべきとの強圧である。国民の税金を一定の産業に特別肩入れするのは確かに不当かもしれないが、農業の維持は、単なる一産業保護だけではなく、「国土の保全」を意味する事を忘れてはいけない。

*

さて本題の現場力である。戦後70年を振り返り、新聞の特集記事を参考に考察を加えたい。

1970年アメリカで「大気浄法」(マスキー法) 自動車排ガスを従来の10分の1に減らす)が成立した時、GMはそんな事できるわけがない...と匙を投げた。ところが日本の本田宗一郎は、オートバイから、自動車に進出したばかりの頃、直ちに技術開発に取り組み、72年には低公害型エンジン「CVCC」を搭載のシビックを発表し、世界をアツと言わせた。現場と経営者が一体となった勝利である。

そしてトヨタは「トヨタ生産方式」を確立し、品質向上・生産効率向上で、コストダウンを図り、超円高(1ドル80円)でも競争力を維持し、現場力の向上により、今や世界一の販売台数を誇る。

その他、不況であった繊維業界では東レが、鉄の4分の1の軽さで、10倍の強度を持つ炭素繊維を開発。航空機などに使われている。

またフィルム業界では、ライバルの米コダック社が12年に経営破綻したが、富士フィルムは、写真市場の衰退を見越し、液晶向けフィルムや化粧品・医薬品にも着手。潮目を読む現場力の向上で、世界を相手に強みを発揮している。

その他現場力を駆使した成功例は無数にあるが、要は日本人のきめ細かい技術力と、たゆまぬ勤勉さによるものと高く評価されている。現場力を向上させる最大の原因は、日本人の「律儀さ」にあると、ある評論家は述べている。律儀な人間は、整理・整頓・清潔・時間厳守。優れた先輩を尊敬し、丁寧な言葉遣いをする。更に中長期雇用が後押しをして、まず正直さを信条とし、他人に対する対面ではなく、それらができないと何よりも、自分自身がいやになる。そういう倫理観が、長く日本人を支配し、敗戦や巨大地震・津波に襲われても、商品略奪などしない道徳観が根付き、身辺の秩序を守り、それが、戦後や自然災害後の復興を促進したといわれる。企業の大小を問わず、現場力の強さが、日本を支え、他国が真似や盗作で為しうるものではなく、日本人が誇りにしてよい「至宝」と言えるのであろう。

第一次三種の神器（白黒テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫）
第二次三種の神器（カラーテレビ・クーラー・自動車）と大量生産で、生産コストも下がり、国民は豊かになり、GDPも500兆円を超えた。しかし、アメリカとの経済摩擦や公害問題など、多くの困難に遭遇したが、現場力の強さで、高度の技術力を発揮し、諸問題を克服し、2010年中国に抜かれるまで、日本は42年間、世界第2位の経済大国を維持した。

*

日本が戦争に負け、破壊されたのは鉄道や工場・家屋などのハードウェアであり、勤勉さや、規律性等ソフトウェアは決して破壊されはしなかった。と経済評論家堺屋太一氏は言う。そのソフトウェアが戦後日本の復興の原動力になった。

江戸時代から日本人の読み書き算盤・識字率は非常に高く、英国が日本侵略の機を窺っていた時、日本国民の識字率の高さは英国の倍以上もあるのに驚き、とても日本を、中国や東南アジア諸国みにたいに、植民地化など出来そうもないと、早々に諦めたという話がある。

寺小屋などでの教育は、近代日本の幕開けに、いかほど貢献したかわからない。私の祖父（明治7年生まれ）は、岩手の貧乏な農民であったが、鉄道も電燈もない時代、学問が大好きで、仙台まで歩いて行き、本を買ってきては、独学で勉強をしていたそうだ。大正・昭和に入ると、農閑期には、村の青年達が我が家に集まり、祖父の講義を多数受けたという。生家の近隣農家から、近年、その子孫達に東大や北大を出た人は何人もいる。

私の故郷岩手の水沢（現奥州市）は、伊達藩の奥座敷。正宗は幕府に逆らって、西洋文化の取り入れに腐心。幕府の目を逃れて、隠れキリシタンも盛んで、西洋文化は、あの片田舎で、深く静かに進行していった。水沢の三偉人の一人高野長英は、長崎でシーボルトに蘭学を学び、幕府批判の罪で入牢。脱獄し、その感化を受けた人たちが、明治維新の起爆剤になった。もう一人の偉人はご存じ後藤新平。そしてもう一人は2・26事件で殺害された第30代首相斎藤実である。その他、椎名悦三郎（元自民党副総裁、鶴見祐輔は後藤新平の娘婿で政治家。その息子俊輔は哲学者である）。

日本経済の推進役「現場力」は、正に日本を世界一流国に押し上げた基本中の基本と言える。工業機械・医療器具・大工道具・農具・各種刃物。各種金型・鋳型など何代にもわたって築かれた技術がたっぷり蓄積されている。そしてこれらの技

術は、日々更新され、時代のニーズに合った、合理的な形へと改良されていった。

物造りだけではなく、芸術部門においても、現場で創意工夫が蓄積され、新たに開発された技術が加味され、日本文化は、益々活性化されてきた。その活力を削ぐような外交圧力は、凜として跳ねのけなければならぬ。現場の活力維持は、即ち「国家の活力」に繋がるからである。

地域に眠る埋もれた歴史（6） 木村進

かすみがうら市出島地区（6）

○柏崎地区

柏崎地区は霞ヶ浦の高浜入りのちようど入口部分になっていて、霞ヶ浦をはさんで対岸は旧玉造町です。霞ヶ浦大橋ができて行方市へすぐ行けるようになったが、船が運行されていた時に比べその衰退は目に見えてわかる。

しかし、この柏崎という地区は霞ヶ浦特産の佃煮等の加工業者やその魚を養殖する生簀が多い地区だ。一般の人は佃煮等も直売所などで売っているのどこで作られているかをあまり知らない。湖岸近くに「斎藤うなぎ店」の看板があります。いまもお店はありますでしょうか？

近くには料理屋さんは見当たりません。この近くには「斎藤川魚店」という鮮魚店があるようです。少し奥に行ったところにある「栗山商店」さんにお邪魔しました。前に何度かお世話になったことがあります。佃煮等を製造販売しています。お店の中の冷蔵庫にいろいろ佃煮等が入って

ました。その場でバックから少し試食させてもらって白魚のバック入をいただいできました。帰ってから、早速ご飯の上にかけてパクパクいただいてしまいました。美味しかったです。このお店はこの店に隣接しているところに生け簀とその先に加工場の工場があります。霞ヶ浦に面した土手の脇にはこじんまりとした「水神宮」が祀られています。

○柏崎素鷲神社の絵馬

定年後少し暇ができたので混雑の時はどこへも行きたくないですね。もう東京などの人ごみを歩くだけで疲れてしまいます。その点田舎はいいですよ。どこに行ってもあまり人はいません。今混雑しているのはひたち海浜公園や子供が遊べる場所くらいでしょう。

今は霞ヶ浦特産の佃煮業者さんが数件集中しているくらいしかイメージがないこの柏崎地区だが、この絵馬を見ていると昔の姿が見えてくるように思う。

この絵馬は、素鷲神社の竹切り祇園の祭事を丹念に描写したもので、柏崎集落の屋並みや霞ヶ浦に浮かぶ数多くの高瀬舟や外輪船（銚子丸）なども描かれている。明治28年10月に奉納され、当時の様子を知る上で貴重な資料だ。

この絵馬は神社の中を覗くと部屋の上に額として掲げられています。一般には絵馬は拝殿の外に掲げられている場合もあり痛みも激しいのですが、割合と状態は良いようです。

素鷲神社の祇園祭に訪れている人々が描かれており、霞ヶ浦にはたくさんの高瀬舟が浮かんでいます。そして何といっても蒸気船が描かれています。

す。この明治に就航した蒸気船は高浜、小川、羽生、玉造と来て、対岸のここ柏崎にわたってきいてたようです。車も鉄道もない時代ですからこの船が細かく街をつないで就航していたのです。そこに物流も生まれ、人の流れもあつたのでしよう。もう一つはこの神社のお祭りの様子がとても興味深いです。

今の石岡のお祭りは明治35年の年番制度の始まるときに考え出されたものですので、この絵馬に描かれている祇園祭りはそれより7年ほど前の様子です。行列の中心は祇園祭らしい衣装を着た人たちがいますが、周りに集まった人たちも当時はみな着物姿です。

今から見ると何か不思議な感覚に襲われますが、それ程昔ではありません。もう一つは、この素鷲神社が高台にあり、または高台から見渡しているように描かれています。今の神社はまったくの市街地と同じ平地にあります。ということは昔は高台にあつたのでしょうか？少し調べてみました。

素鷲神社の弘仁9年（818）正月に天王山の上に建てられたが、山崩れで大破して元和5年（1617）再建遷宮し、また万治2年（1659）に麓に遷宮したとあります。

国土地理院の地図で調べてみました。神社の裏は高さ20m以上の小山で山の北東側は崩れた跡がはつきり見えます。

天王山という名前は書かれていませんが、素鷲神社はどこも素鷲鳴命（スサノオノミコト）を祭り、天王さんと呼ばれているところが多いようですから、この名前も自然に付いたのでしょう。でもこの絵馬が描かれたのは明治期ですから、すでに神社は現在の山の麓にあつたのは確かでしょう。

お祭りは7月の祇園祭り（竹切り祇園）はどんな風に行われているのでしょうか？

調べて見ると、以前は馬の参加もあつて、とても賑わつたという。祇園祭は7月15日から17日までで野菜を供える古式の祭事もあつた。御飯屋が霞ヶ浦湖畔近くに設けられていた。祭りの前には、前面の霞ヶ浦湖畔に松と竹の注連飾りを作る。これは霞ヶ浦のこの場所に太古ご神体が着いたという伝説があり、伝統の行事だという。また、神社内には津島神社が別に祀られてあり、祇園祭の終了後マコモで鳥の形をはり祭りと共に奉納するという。これはここが元々天王社であつて、寺であり明治に皆スサノオをまつる神社に変わつてしまつたためであり、その変遷の跡を残す貴重な伝承だと思ふ。

○柏崎素鷲神社

柏崎素鷲（そが）神社に奉納されている絵馬を紹介しましたのでその神社も紹介します。素鷲神社（ツガジンジャ）は各地にたくさんあります。対岸の玉造や玉里といった古い地名のところに残されています。神話に出てくる鷲（おし）は阿波の忌部氏に関係があるとも思う。しかし明治の廃仏毀釈で、ほとんどの素鷲神社は同じ祇園祭りをしているスサノオ（素盞鳴尊）を祀るようになった。拝殿前の入口には2種類の狛犬が置かれています。古いほうの狛犬は貫禄あります。豹のようです。境内には大きなケヤキの太木があり、二股に分かれた根元に小さな祠が置かれています。御神木と思われ「オガタマ」と書かれたの古木があるが、ネットで調べてみるとこれはタブノキの間違いだろつとなつていた。しかしこれも別なサイトでは「オ

ガタマ」と「オガタマノキ」は別物でオガタマはクスノキ科のタブノキで、オガタマノキはモクレン科の別の木を指す。とあった。はつきりしないがタブノキに属するオガタマということではないらしい。

ここの本殿は彩色されたもので、少し変わっている。真ん中の模様は何を表しているのだろう。この色合いはいままでにあまり見たことがないようだが・・・。

本殿にはこのように彫刻が施され彩色されている。この神社に伝わる祇園祭の山車も彫刻や彩色がされているという。きつと石岡のお祭りの山車祭りにも影響を与えているように思う。

○田伏「鹿島神社」

田伏地区も霞ヶ浦大橋の近くに田伏城があった（現在の実伝寺裏山あたり）場所ですが、この鹿島神社は湖岸に近い場所にあります。湖岸のそばの神社はこのように松が植えられている場合がほとんどです。創建は承平7年(937)とされていますので、古くからあるのでしょうが、詳細は不明です。神社の狛犬も堂々としています。しかし、この神社には少し変わったものがあります。

太白（たいはく）流の和算で解いた算問の解き方を額にして神社に奉納したものです。日本の算数については江戸時代に盛んになり、関孝和が始めた関流がもつともよく知られています。しかし、私には関流も太白流も違いがわかりません。算数の難題が解けたことを感謝して神社に「算額」を絵馬と同様に奉納することは全国でおこなわれているそうです。

全国に975面の算額が現存している『例題で知る

日本の数学と算額』森北出版。そうですが、この出島地区でもこの和算を熱心に学んでいた人たちがいたことは今となっては驚きです。

神社の御神木でしょうか、古木（タブノキ？、スタジイ？）の根元には祠が置かれていました。写真でもわかるようにこの場所は平地で、湖までとの間に田が広がります。しかし、この神社ができた頃はきつとこの場所が湖に面していたのでしょう。

祭礼は10月28～30日で、当屋（とぐら）祭というお祭だそうです。昔は盛大におこなわれていたようですが、最後の直会（飲食会）は中止となったようです。昔は火を炊いてその周りで酒を飲んだのでしょうか。

○出島散歩（おわりに）

茨城県かすみがうら市の旧出島村の埋もれた魅力を掘り起こそうと約二ヶ月に渡り休みなどを利用して歩きまわりました。この会報にも6回に亘って掲載させていただきました。

この地区は明治後半からの鉄道の発達に伴う霞ヶ浦水運の衰退、及び車社会の発達によりどこかに置き忘れられてきたような地区でもあります。一般の観光という面ではそれ程魅力のある地区ではないかもしれません。

しかし、そこを何気なく訪れて散策してみると、今では忘れられてしまった昔の人たちの生活が見えてくる場所ではないかと思えてきます。

ここを探索してみようと思っただけは、平安時代やそれ以前の古東海道がこの出島地区を通っていたかもしれないの思いました。しかし、その痕跡を見つけることはできませんでした。そしていまだ霧の中にあります。

でもこの地区を何気なく掘り起こしてみたら、これはとても素晴らしい内容が掘り起こされてきました。まだまだ掘り起こしが足りないようでもあります。こんな一見つまらなそうなどころにたくさんのお宝が眠っています。

ということ、その他のところにも同じような宝物がいっぱいあるように思えます。私が掘り起こせるのはほんの少しばかりです。皆さんもし興味がおありなら身近な場所を少し掘り起こしてみませんか？

何気なく掘り起こしてみると意外にも向こうから語りかけてきます。

かなり色々なところを掘り起こしてきたのですが紹介できなかったところもたくさんあります。

これについてはまたの機会とします。じっくりと振り返るとなにか見えてくるかもしれません。

時間が許すときにまた掘り起こせたらいいなと思います。

出島シリーズはここまでとします。次回からは雑まつりで知られた真壁の周辺を散策して感じたことなどを綴って見たいと思います。

（記事は2012年5月に書いたものです）

だいだらぼっちに合って

伊東弓子

向う場と呼んできた目の前に見える向う岸。地域も人も知らないのに何故か好感を持っていった水辺という共通の環境の中で生活してきたからだろうか。でも知り合いのいない地域への出発、多少の不安を抱えての取り組みは、その地域への好

奇心、人との出合の喜びに変わっていった。

「御留川を歩きましょう」の呼びかけからは入らずに「みんなで歩いてみませんか」と、話しを始めた。「三村でも、石川でも歩いてるよ」と返ってくる声が多かった。そこで御留川を歩く会の話しを出し説明していった。知らないことを知らせてくれてありがとうと喜んでくれたお年寄りが多かった。もう少し若かったら行けたけど……と八十代のお婆ちゃんの写真が印象的だった。お叱りも頂いた。ある農家で「だめだめそんなところじやない。そんな隙はないよ」と、遅しい農家の母ちゃんは通り過ぎていった。

当日は、石川地区は祇園祭りの初日と知り、予定を一部変更した。二十四人の出発となった。今日も私は優柔不断さでいながら強引さが専行して実りのない結果を起してしまった。それは鉾の宮と境堂の線引きの印を何としても実行したくて、急遽説明し実施の段取りをした。幟を持って鉾の宮（高崎、江島河岸附近の排水門）に向かう私達三人と、歩いて境堂（境堂舟溜り）に向かう参加者同時に出発した。結局は失敗だった。歩く人と車の移動の時間の差、幟が南風に煽られて縦一本「1」の字になり、見えなかったとか。文明の利器携帯電話を持っていかなかったこと。大声だけでは届く筈もなく相変わらずの抜け作だった。歩き組の中に一寸したハプニングが起きて、それを助けてくれた人がいたと後で聞いた。躓いた時手を差し伸べてくれる人の暖かき、その人柄を感じ、私の失策も許されるような思いだった。

境堂舟溜りには七〜八艘の舟があったが、本業として居る人はいないと聞いた。好きで舟を出す人は三〜四人いるが大して取れないと言っていた。

漁の勢いは何処でも見る影もない。

地元の人の参加で御留川の⑭十六兵衛川、⑮松下川、⑯浜卸川の場所が薄っすらとわかった。名称の一部が残っていたからだ。下河岸、中河岸、西河岸があつて米、薪、醤油を扱うのが多かったという話だ。ギター文化館での展示会に来てくれた人で石川出身の人の話しによると、「友の家は大きな家で本が沢山あつた。今思うと古文書という物も沢山あるのに驚いた。小学校低学年の頃だつたが立派だと思つたよ。丁度耕地整理をする頃、石の佛さまみたいなものも埋めたみたいだ」と。「もういんめい……」といいながらそう話していた。

これも一証言だ。確かめると何かわかりそうだと騒ぐ気持ちを押さえた。夜遊びは若い人の特権のようなもの、高崎からも来たし、こちらからも行つたそうだ。親父の時代の話だと聞かせてくれた。仕事も現役の時、私もここに何度立つたらう。我故郷を眺めながら涙を流した。あの台に住む一人足らずの人達が陰口を叩き、誹謗中傷し合い、人を陥れながら生きていく。私もその一人だ。ああ！空が広い。水は絶えることなく流れ、大地は動ずることなく此処にある。ああ！小さい、小さい私と思ひ直して帰つたものだった。

山崎の森を裏口から登り木立の中で一休みした。五十八年も前の中島先生の姿もなく、古い社務所も代替わりしていた。この社は古墳の上に来たものだと初めて知った。鎮魂の意を託して社を建てたという。流れ海に入つて来た人、漁師にとつては目印でもあつたそうだ。国府から出た使いは高浜古津で舟に乗り、井関入江、長者峰の駅馬、伝馬に寄つて陸路を都へ行った人々を見守つた所だろう。石段に腰をおろし、赤津さんの資料をも

とに話しを聞いた。古代の中央集権と国府との結びつき、背景を話してくださった。素晴らしい屋外学習だった。正面の鳥居近くに「平和の碑」がある。この地区から兵隊として満洲へ行った人が行方不明のため、戦後五十年の時、地域あげての寄付で建てたというが、喧嘩ごうごう纏まるのには大変だったとか、平和も簡単にはいかないねと仲丸の人との話に出てきた碑だった。

そこで地元の男の人三人は帰つた。恒例で石岡一高野球部後輩の試合の応援に行くそうだ。これもまたよい話し。後は女の人が続けて地元のことを話してくれた。

森の中から降りると目の前は広大な水田地帯だ。中央辺りに堤がある。稲田と蓮田の違いが目に入る。八木は八丈島のようなものだと思つたが、古代には台地まで水がよせていた訳だし、大水が出る時は島のように孤立したことだろうと思つた。この広い水田を造り上げるには周囲の土をどれ程使つたことだろう。壊した山や古墳もあつたと聞く。四、五年前、森の裏側の田で仕事をしていた男の人に話しを聞いたことがあつた。爺さんの時代に堤防づくり山土を使った。この辺の小高い山は殆ど崩し、今では田になつていく。と口数は少ない中に、農業で生きてきた精神が滲み出ているように素敵な人だと感じた。今でも農業続けておいでかな。

いよいよ大人形に合う梶和崎の三叉路にきた。左は八木へ行く道、私らは右に曲がる。左谷津田の台の長者峰、古酒にもお人形はある。井崎農村センターのトイレを借りる。以前ここは貯水池だったが今芝生を敷詰めた広い場所。孫達と駆けまわり、走り回つた懐かしさが蘇る。来た道に戻る

筈だったが皆さんどんどん坂を上って行く。遠回りよと言いたかったが、勢いで進むのもいい。途中代田の大人形にもあった。大人形も単にこの地域のものではなく常陸国風土記に出てくる「だいだらぼう」からの繋がりによるものだと赤津さんは語る。

後、先大分離れたことを心配して、車で三、四回ピストン輸送をして運んでくれたことは本当に有難い。夕べ資料つくりの紛争し、今朝は行事の受付を済ませてここへ駆けつけてくれた。思えば泉ヶ丘保育園の渡辺先生、灰吹屋の山口先生達から石岡、近辺の町、村の歴史を教えてくださいたい仲間だった。豊崎、中島、山口、渡辺先生達から池上先生へと繋がつて私この道を歩いています。夢多く、勉強に励み、実行する赤津さん。前のように仲間をつくって行ってください。そうすれば三ツ又沖に眠る国分寺の鐘のことも実験できるでしょう。今の県政の中心にいる方達は水戸黄門から茨城の歴史であるかのように考えているかのよう聞きましたが、県南の長い歴史を知って頂きたい。その上にたつて茨城のあり方を考えてください県知事さん！

天候に恵まれて歩くにはよい日だったが一日違いの翌日は暑くて暑くて大変な日。不満が出たことだろうと改めて大自然に感謝した今日、下石川の人達も胡瓜栽培の一休日の協力ありがたかったです。暑さとビニールハウスの暑さに充分気をつけてくださいね。浜通りという古い名のある道を通らず仕舞いでした。忘れずにいます。十一時半のサイレンが井関で鳴ると聞いたのを確認しようと思いつながら忘れたのも後で確かめます。盆網にも大人形つくりにも参加せず、暑さと忙しさ

に日を送った夏、何が残ったのかと思いきす頃。子供を育てる頃、石川の方から流れを渡って太鼓が聞えたものだ。胸がどきどきする思いで、子供と聞いていた昔。小さな音にも子供と一緒に楽しみ、思いを馳せることが出来たのに、今はその音を聞く耳ももたないのかと褪せていくいく自分を思う。

筑波海軍航空隊記念会館（2）

小林幸枝

一昨年冬、映画「永遠の0」のロケがきっかけで筑波海軍航空隊記念館がオープンとなり、去年五月連休までの予定が、好評だったことでまだ続けられていました。

今年、地下施設の見学が出来る様になっており、その地下戦闘指揮所と地下応急治療所を観てきましたので、少し紹介したいと思います。

○地下戦闘指揮所

ここは、昭和20年2月に出来た地下要塞です。戦況が悪化し、筑波海軍航空隊も激しく攻撃を受けるようになりました。そこでも司令部庁舎が爆撃された場合、ここに場所を移して戦闘を指揮するために作られました。

地下の戦闘指揮所には、発電機や通信設備などを運び入れ、準備をしたのですが、司令庁舎が無事残ったことで、実際には一度も使われる事なく終戦をむかえました。

この部屋に設置されていた発電機や配電盤などの跡が当時のまま残っています。ケーブルを設置する陶器製の部品などはそのままあり、部屋の中

には通気口をはじめとする色々な穴が明けられていました。

○地下応急治療所

資料や証言から、薬や包帯などが常備された地下応急治療所の存在は分かっています。終戦後壊されて埋められたといわれていましたが、発掘、再現されていました。

記念館の中は、映画の影響なのか展示品が以前に来た時よりも増えています。

こうした戦争の史跡をみると二度と戦争を起さしてはいけないと改めて強く思いました。

機会がありましたら是非一度見学してみたいかがでしょうか。

県指定文化財（6）

兼平智恵子

おどるよ踊る風に乗って

習うまつり太鼓

智恵子

いつもの落ち着いた石岡の町並は熱く燃えるおまつりを前に活気づいています。

今年、例大祭が行われる常陸國總社宮に隣接する市民会館にはほぼ元の場所に移りました陣屋門、同じく隣接する石岡小学校敷地内に四月にオープンしました石岡市ふるさと歴史館では古代から江戸時代までの石岡の歴史が展示され遠き石岡の歴史にも想いを馳せてみては如何でしょうか、お勧めいたします。

さて、今回の県指定文化財はおまつりに因んでの石岡ばやしについてご紹介いたします。

○石岡ばやし

無形民俗

指定 昭和五五・二・二八

石岡市教育委員会発行「石岡市の文化財」によりますと常陸國總社宮の大祭とともに江戸時代の中期、武家の祭りが、民衆に移ったところから、儀式的に大切に伝承されてきた芸能である。

五穀豊穰、無病息災、家内安全 商売繁盛を祈願して、街を練り歩く山車、獅子によって大太鼓、つけ太鼓、鉦、笛によるおはやしが演ぜられる仁羽（みんば）、四丁目（しちようめ）、新馬（しんば）などの曲目がありそれぞれに「ひよとこ」「おかめ」「キツネ」の踊りがつくとありますが……果たして、いったいどれだけの石岡ばやしが指定となっているのでしょうか。

教育委員会を尋ねてみました。

石岡ばやしの成立をたどる事が出来るでしょうということ、平成元年十月一日、石岡市文化協会発行、「石文協のあゆみ」の中から文責、松本操氏の「ひよとこの鼻息」を参考資料として頂きました。

松本操様の石岡を思う、心に残る素晴らしい文中から、それでは石岡ばやしの成立をたどっていきましょう。

岩崎金太郎氏という本来の石岡人ではなく生まれも育ちも東京、幼少にして父母に死に別れ生きるが為に人間として行い得るあらゆる辛酸をなめて成長し、まるで大衆小説の主人公のように、親分衆の一人となっていた岩崎氏は、奥様の志げ夫人の出身である石岡の行里川に第二次大戦の末期に疎開して終戦を迎え、この石岡に住みついたとの事です。時には恐れられ、時には親しまれ、時には頼りにされる、誰れ知らぬ者もないほどの

人となっていました。

当時、県内で有名な行事であった、日立土浦間の駅伝競走に一年も欠かさず出場選手に接待のミルクを提供し続けた行為を始め、時には石岡の発展の為になるならばと、四国金刀比羅宮開基以来始めてといわれた、石岡金刀比羅神社への奉幣使参向臨時大祭を実現させたり、私費を投じて恋瀬川原における花火大会を行って市民の慰安に供したり、公私にわたる奉仕活動を続けて来ました。日常を知る人々には、今後はもう当分の間、出て来そうにもない人物として死後にも暫らくの間は人々の話題の中心になっていた程だそうです。

岩崎氏の脳裏に、石岡の祭りに関してある考えがひらめきました。年を追うごとに盛大さを増し、文字通り関東三大祭の一つと称され始めた石岡のおまつりを見、その獅子舞の勇壮さやお囃子の賑やかさに比較して、何故これだけの祭りを挙行しながら宣伝に力を注ぎ、外客の誘致を計って、市勢の発展に利用して行かないだろうかという疑問を抱いたそうです。

戦後色々と社会機構が改革され変化していった中で各地の神社の祭りの形態の変化というものも代表的な一つであり、かつて祭礼は権力者が齋行し「一般民衆はお賽銭をあげて詣でるだけ」から、民衆の手に祭礼施行の中心がうつると共に神社祭礼は山車や獅子舞いのお囃子そのものに中心がうつって行きました。同時に各地に伝承されていた多くのお囃子はその内容や歴史的な伝統等により国や県等から民俗文化財として指定され、名譽と誇りをあたえられて大きく変貌して行きました。さて石岡のお獅子はどうであったのでしょうか。岩崎氏は次善の策を模索しながら、各個ばらばら

の各町囃子連に連帯感と使命感を持たせようと、例のとおり一切の経費を負担し開催されたのが昭和四七年十月二二日、第一回石岡囃子コンクールが行われ会場の石岡市民会館大ホールは超満員の大盛況で有ったそうです。この時、石岡囃子連合保存会が結成され、石岡囃子の名称が生まれました。

連合保存会の発足当時は、会長 岩崎金太郎、副会長 松本操・篠塚和夫、そして土橋獅子舞保存会、金丸囃子、染谷囃子、三村囃子、泰輔囃子、守横囃子、若松囃子、府中囃子、八州囃子、常陸囃子、と十の囃子連で具体的に行動を起こそうとした矢先、昭和四八年三月二三日、忽然として、岩崎金太郎氏が急逝してしまいました。

虚脱したような幾日かが過ぎ支柱を失って空中分解することなく、自発的な新しい気運と息吹が芽生え、同年十一月二八日には、第二回石岡囃子コンクールが開催され、会則の確定や経済的基盤の確立と、会としての内容と、体裁も整い、市当局も誠意を認め、石岡市指定無形民俗文化財として認定されました。

その後県の認可を目標に、第二の岩崎氏である手塚克彦氏の指導と協力を得、石岡囃子は遂に昭和五五年二月二八日茨城県指定無形民俗文化財（十のはやし連の内九のはやし連）として認定を受けたのでした。

現在の石岡囃子連合保存会は、土橋獅子舞連、若松はやし連、常陸はやし連、金丸はやし連、国分はやし連、染谷はやし連、三村はやし連、香丸はやし連、守横はやし連、青屋はやし連と発足当時と同じ十の囃子連の連合保存会として石岡囃子は県主催の公的な行事に出演、毎年開催される国、

県認定の無形文化財の競演する「ふるさとの祭り」への出演、等毎年五〜六回程度の公的な出演を要請され、またイタリヤ、フランスへも進出し、今や応時切れない程の多忙となっているそうです。

おまつりでの石岡囃子ばかりでなく、生きた観光資源として郷土石岡の発展に寄与なさってる保存会の皆様の気迫を知ることが出来ました。今年もおまつりでの「ひよつとこ」「おかめ」キツネや獅子との共演を楽しみにしております。

今回の県指定文化財の紹介は一軒のみでした。

【風の談話室】

今年も石岡のお祭りがやって来た。

石岡のお祭りに関しては、編者も色々苦言を呈したい所があるが、昨年の7月号に、故太田尚一氏がこの風の談話室に投稿下さったお祭りに関する文がある。氏の当云報への最後の投稿であった。氏のふるさとを思う心をくんで、ここにもう一度掲載させていただき、石岡のお祭りのあり方について考える機会を改めて持ちたいと思う。

総社宮祭りと市民の矜持

太田尚一

かつて那珂湊の天満宮の祭りについての記事を扱ったことがある。大層敷しい伝承を今もつて継承し、海とともに生きる街の人々の矜持が感じとれた。

この天満宮の祭りにも獅子(ささら)・屋台が弾き回され、その見どころは獅子の囃子をリードする先笛の存在である。この先笛を奏することが許されるのは心正しく、一途に笛に精進し人々から尊敬され

る立場にある人に限られ、大相撲の横綱を張る様な、その道の頂点に立つ人が選ばれる。

また、天満宮の祭礼には、「さがりは」という雅びな曲を奏する楽人の存在があったが、現在ではこの曲は奏されてはいない。

その後市が獅子の囃子を新たに「下がり羽」と称して、市の無形文化財に指定したが「那珂湊獅子囃子保存会」の面々により、市の史料解釈に飛躍があったとして「下がり羽」と「獅子の囃子」は個別のものとして論証されたのである。

(菊池恒雄「那珂湊ささら旧聞控」／「市文化財『下がり羽』について」『常総の歴史』6・7/27)

☆

翻って当地、石岡の総社宮の祭りはどうだろうか、検証してみたい。小生の本音は、祭の主旨、歴史を正しく認識し、石岡人のプライドを以て正しい喧伝をしようということにつきる。

この祭礼に対する役所・総社宮の認識の甘さが際立っている現在、ただ傍観していることは市民の一人として容認致しかねない。自分なりに、問い合わせ、申し入れを何度も繰り返して、かつて役所が市の広報誌で記述していた。祭の濫觴についての記事、

「紀元八世紀頃、武士の祈りから」とか「元禄時代武士の祭りが民間に移行した」とかの記述はようやく取り下げられたが、未だ、時の観光協会会長・副会長によって創り出され、対外的に問題のある「関東三大祭り」のフレーズが横行し、平成二十年からは、祭りの濫觴のかわりに出てきた、天下泰平、国家安穩、萬民豊樂、五穀豊稔との、どこの祭りでも飾られる用語である、これらのどこがどう好ましくないのか、石岡の市民は、全く無関心である。祭りの濫觴・喧伝文句、皆々全く根拠のない根無

し草であることだ、なり振り構わずの根無し草は必ず枯れる。

八世紀の武士の祈り、等と言えば、専門家はもちろん識者からも一笑に附されることは明らかだ。武士と名乗る、或いは武士と呼ばれる人々の登場は、平安中期から後期の十一世紀以降とされる。さらに総社の用語の文献上の初出は、承徳三(1099)年、因幡国の国主に任じられた平時範の日記の同年二月条とされている。

櫻井明氏の「祭礼の伝承」(『常府石岡の歴史』(石岡市教育委員会発行)所収)によれば、

長元五(1032)年『更級日記』の作者の父菅原考標が常陸介に任じられた時の『更級日記』

に記された消息から、考標が神拝を行ったことが記されて居り、この時点で総社の創建は未だ成らず、であったことが知られるが、「総社文書」の「治承三(1179)年総社造営注文」は前半部を欠いてはいるが総社に関する最古のもので、これが総社創建時のものか、その後の大規模修造営時のものか明らかではないが、やはり常陸国総社も一般総社の通説通り十一世紀から十二世紀の成立と考えることが出来る。

にもかかわらず総社の祭りの濫觴を八世紀に求めてしまうのは、一種、いわゆる系図屋の作成する当家の先祖は源平藤橘に発するという様な作為的である。次に記述された、武士の祭りが元禄期には町民が参加する庶民の祭りとなった、という、これらの根拠や文献を問うと、平成二十年からこの記述は取り下げられた。

しかし未だ役所により活字化され、最強の喧伝用語となっている「関東三大祭り」のフレーズは最大の根無し草株であることは認めざるを得ない。櫻井

明氏が「祭礼の伝承―常陸総社祭礼―」の関東三大祭りの項で、

「関東三大祭り」という文言とその相手に武蔵総社・大國魂神社の「府中暗闇祭」と利根川・北浦・霞ヶ浦水運の要衝である佐原の「佐原囃子」をあてたことは、歴史的背景を見事に表現した極めて秀逸な創作であった。

と記述されている。(傍線は筆者)

何んと歴史研究者としての教養溢れる最大の皮肉であろうか。一見、批判するにも相手を思いやり、その豊潤なる発想を評価しているのだが、作為である、と断じて居られる。

「井の中の蛙大海を知らず」という慣用句がある。一つの井戸、一区画の田圃の中なら通用する「関東三大祭り」、大海ではどう評価されることになるのか。根っ子のところを問われると答えが出来ない、それでも「観光用語として外せない」と居直られた、石岡人の矜持をかなぐり捨てた態度、見識と解釈される。こうした一にぎりの人達によってリードされる当地はきわめて不幸であり、これから石岡を背負う若き人々への影響は計り知れない。

☆

江戸時代に記録のある、天王社の祇園祭や愛宕神社の祭礼の行事は、いわゆる「お浜下し」という神が水辺で禊をして、その神威をあらたかに復するというものである。

ここで、総社宮の大祭はどの様な祭りか考えて見たい。総社宮の祭礼は、江戸時代から明治二十年頃までは、記録に残るのは神事として奉納相撲が行われただけである。

明治二十年八月に、総社宮催事に初めて香丸・中町・守木・富田の四組の年番制を導入、奉納相撲の

執行を取り決めた「常陸国総社宮例祭議定」の記録が、近代の祭礼に関する最も古い記録である。これによりこの時点で総社宮の祭礼は、奉納相撲のみであったことが知られる。恐らくこの年番制をもとに、徐々に現在の様な祭礼行事が発想されて、明治三十年九月になって青木町の宮大工・小井戸彦五郎(万延元年一月〜昭和十四年十二月)によって神輿が奉納されて、神輿が御飯屋へ出御する祭礼行列が創出されることになる。

江戸時代の祇園・愛宕祭礼の出し物を引き継ぐ富田のささら・木之地のみろく・土橋の獅子等、そして明治三十二年になって、中町の日本武尊をいただく江戸型重層山車が登場、総社宮の祭りの一層の華やかさを演出することになった。

これより少し前、明治二十九年、仲之内町の福徳稲荷神社の祭礼に奉納された獅子頭が、製作年号が明らかでないものであるが、土橋の獅子は、すでに嘉永七年の香丸組の御用留に、「土橋・大獅子(當年より定例)」との記述があり、獅子頭で最古のものと考えられる。

伝承では、宝暦(一七五一〜一七六四)の頃、土橋町で世話になって渡大工が、御礼として製作置いていたものと伝えられている。

明治三十年前後に創出された総社宮の祭礼行事は次第に各町内が参加することとなり、明治三十五年になって新たな祭礼執行の年番制が議決されることになり、現在の祭礼行事の原型が形造られることになった、と考えられる。総社宮の例大祭は比較的新しい祭礼行事なのである。

そしてその祭礼行事の様相を一瞥すると、行列を先導するのが、日本神話で皇祖・天照大神の孫瓊杵尊降臨の際に道案内をし、のち伊勢の五十鈴川上

に鎮座したと伝える神、猿田彦であり、続いて神旗が、特に天皇の錦の御旗が奉持され、天皇家の菊の御紋を付けた神輿が続く、まさに「近代天皇制国家によってオーソライズ(公認)された行列であった」とがうかがえる。時代的にも、王政復古後、日清・日露の戦役で天皇のご威光が頂点を極める時期に当り、国民の皇室への敬畏が最も昂揚した時期でもある。

かつて、不慮の火災で拝殿を消失した総社宮拝殿の復興竣工記念祭が昭和六十年九月に行われ、小冊子の記念誌の中で石崎紀夫宮司は次の様に記している。

神威四表に輝き神沢(神託) 万民に洽しの幟旗の如く皇室の弥栄、国家の安穩、社運の隆盛、氏子の崇敬者各位のご多幸を念じ……。

と、第一義に皇室の弥栄が念じられている。また「祭礼の伝承」で櫻井明氏は次の様に記されている。

「今日常陸総社宮例祭として行われている石岡のまつりが、江戸時代においては天王社の祇園まつりであったことは、興味を引く事実である」という『石岡市史』石岡市史 下巻』の記述に對しての、「形態から考察して総社の例大祭は、江戸時代において祇園祭だとするのか、とすれば些か抵抗がないわけではない、祇園祭は祇園祭であって総社宮の祭りではない」(天山隆光「祭礼雑考」『常陸総社宮例大祭と獅子』)という批判は正鵠を得ているといわなければならない

総社宮の例大祭が武士や武家に始まる祭りではないこと、明治の中盤になってからの新しく創出された祭りであること等、先学に導かれて得た私なりの結論である。

平成二十年から記述されている天下泰平、国家安
穩、萬民豊樂、五穀豊穰等役所の独断と偏見ではあ
るが、今後こうした祈りを奉じて祭行しようという
のであれば、総社宮、氏子会、各町内の祭典代表等
との合議の上承認を得る必要がある。

そして、根無し草の喧伝文句は撤回し、真に誇り
得るもの、江戸時代からの大獅子の存在とか、江戸
の天下祭に参加した百余台の山車で、「將軍家の上覧
に供した現物そのもので」日本橋の町内から金丸町
が大正十一年に購入したため、翌大正十二年の関東
大震災での被災を免れた唯一の弁財天をいただく江
戸型重層山車の存在等。石岡人の矜持を担保するこ
とが重要である。(二〇一四年六月)

《読者投稿》

先月号に続き、京都府の今井さんから今月も投稿
いただきました。

会の名称通り、色々な風が吹き込んで来てくれる
ことは大変うれしいことです。
常に新しい風や水が流れ込んでくれる事で、変化・
活性が生まれ、希望を紡ぐことが出来るのだと、新し
い友に大いなる感謝を申し上げます。

私の国府巡り・橋立

京都府精華町 今井 直

京都府北端の宮津湾にある天橋立は、長い歳月
をかけて自然が造りだした風景で、八千本の松と
白い砂浜の道が海の上に3.6kmも延びている。言わ
ずと知れた日本三景の一つである。橋立を堪能す
るなら、潮風を素肌で感じながら徒歩で通り抜ける
のが一番だ。レンタルサイクルや遊覧船を利用

する方法もある。

人気の橋立展望台は「〇〇観」と呼ばれ、東西
南北にある。観光客に最も知られているのは、京
都丹後鉄道の天橋立駅からすぐのリフトに乗り換
え、山頂の遊園地から見る南側からの眺めだろう。

橋立の松並木が天に昇る龍の姿に譬えられること
から「飛龍観」という。対岸の山腹にある笠松公
園からの眺望は、右上がりに勢いよく昇る龍を見
立てて「昇龍観」。同じ「龍」でも印象が全く異な
る。別名「斜め一文字」。ここでは大抵の人が「股
のぞき」をする。まさに絶景！天と地が逆転し天
に架かる橋を見ようと、最近は多くの若い女性も
股のぞきに挑戦するようだ。デジカメを上下逆さ
まにして撮影すれば済むことと言ってしまえば身
も蓋もない。

西側の大内峠からの眺めは「一字観」。橋立から
直線距離にして約6kmと遠く離れているが、橋立
が横一文字に見える展望台がある。毛筆で「一」
の字を書いたように、始筆から送筆・トメまでき
つちりと確認できる。

「雪舟観」は東側の半島からの眺めだ。水墨画
を大成した雪舟が『天橋立図』を描いた場所と言
われ、その名がついている。稲荷神社へ登ってい
くと狭い展望台があり、雪舟による鳥瞰的な構図
の実景が目の前に展開する。最晩年の80歳頃の作
と云われ、ここで絶景と対峙した雪舟は見事なモ
ノクロの世界を創造した。

笠松公園へ登るケーブルカー&リフトの乗り場
は府中駅といい、地名が示すように丹後国の国府
はこの辺りにあったと推定されている。景勝の地
だけでなく、天橋立という天然の防波堤があり、
人や物資が集まる良港で、丹後国の政治経済の中

心地であったようだ。宮津という地名は、後述す
る「籠之宮(このみや)」の宮の津(港)からついた
という。周辺は昔から観光客でにぎわう民有地の
ため、これまで本格的な発掘調査はなされていな
い。

『続日本紀』によると、平城京遷都からまもな
くの頃、丹波国の北部を割いて丹後国が独立した。
分国すると名称は、吉備国(きびのくに)を備前・備
中・備後に、越国(こしのくに)を越前・越中・越後
にと、都との位置関係が従来の原則であった。し
かし、分国後の丹波国はなぜか丹後国に対して「丹
前国」とはされなかった。

平安中期、丹後守に任じられた夫に従って丹後
国の府中に赴いたのが、三十六歌仙の一人・和泉
式部である。折しも、歌詠みとして頭角を現して
いた娘の小式部内侍(こしきぶないし)が、宮中での
歌合せに選ばれた。殿上人のひとり小式部に、
「歌を代筆してもらった母からもう手紙が届いた
か」とからかったところが、当意即妙に巧みな掛歌
でやり返したのが、小倉百人一首六十番の歌

大江山 いく野の道の 遠ければ

まだふみも見ず 天の橋立

府中地区の隣の国分地区に、丹後国分寺跡があ
る。橋立を一望できる台地上に位置し、飛龍観や
昇龍観のような俯瞰ではないが、のんびりとした
眺望は世俗の煩わしさを忘れさせてくれる。敷地
内にある府立郷土資料館で聞いてみると、奈良時
代の遺物は軒瓦2点のみで、塔跡や金堂跡に整然
と並ぶ礎石は、14世紀前半に再建された伽藍のも
のらしい。雪舟筆『天橋立図』に国分寺の金堂と
五重塔が見られるが、現存の礎石群はこの絵図の
配置と一致している。国宝『天橋立図』は貴重な

歴史資料でもある。

府中駅の隣に、丹後一宮である籠之宮(このみや)が鎮座する。笠松公園へ急ぐあまり素通りする人が多いが、「お伊勢さんのふるさと・元伊勢」と云われ、由緒と高い社格を誇る宮である。

皇祖神・天照大神が伊勢神宮に鎮座するまで、およそ90年の長い紆余曲折があった。八咫鏡(やたのかがみ)は太陽を神格化した天照大神の御神体で、代々宮中で祀られていたが、同床共殿では畏れ多いと崇神天皇が大和の三輪山に遷座し、皇女の豊鍬入姫命(とよすきいりひめのみこと)に祭祀を託した。その後、垂仁皇女の倭姫命(やまとひめのみこと)がこれを引き継ぎ、更に理想的な鎮座の地を求めて、大神を奉斎しながら各地を転々と遍歴したと伝わる。それゆえ、伊勢に遷るまで一時的によせ祀られた神社は「元伊勢」と呼ばれた。

豊鍬入姫命と倭姫命はともに、天皇の名代で伊勢神宮に奉仕した斎宮(いつきのみや)の始まりとされる。日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征に発つ祭、伊勢神宮にいる叔母の倭姫命を訪れ、草薙剣(くさなぎのつるぎ)を賜って大活躍したと『古事記』は語る。斎宮は飛鳥時代に制度化され、天武皇女の大伯皇女(おおおくにのひめみこ)が初代の斎宮として伊勢国に下向した。悲劇の貴公子・大津皇子の姉君である。皇位継承に敗れ死を覚悟した大津皇子が、別れを告げるため伊勢にいる姉君を秘かに訪ねた逸話は、いつの世も人の心を打つ。

籠之宮や三重県度会(わたらい)にある瀧原宮(たきはらのみや)など、各地に残る元伊勢は現在も厳かな佇まいだ。大杉が立ち並ぶ参道には心改まる静寂の時流れ、パワースポットの霊力のおかげか、清々しい気分になれる。

以上が観光を兼ねた私の国府行脚「丹後国」の取材見学の内容である。橋立は何度も訪ねているが、籠之宮を逃していた。それで先日、参詣したときのこと。暑い日だったが爽やかな気分になり、一の鳥居で振り返った時だった。手水舎にいた若者が、柄杓で清めの水を頭からかぶるのが見えた。しかも二度三度と坊主頭に。「そんな身の清め方ってあるか」私は思わず言いそうになった。すると連れの女性と二人して、キヤアキヤアと股のぞき始めた。恐らくリフトで降りてきたのだろう。「笠松公園ならよいが、神社で股のぞきをするなッ」何をか言わんやである。

養生日記(詩二編)

堀江実穂

「落とした涙」

片耳が難聴になったこと
精神障害を持ってしまったこと
車に乗れなくなってしまうこと
離婚して子供に会えなくなったこと
健康者の友人達が去っていったこと
数えきれないほど涙を落とした
絶望に命を落とそうとした
ある時、違った風が吹いた
涙が涸れたむこうには幸せが待っていると
同じ障害を持つ仲間がいた
病気を理解してくれる人がいた
落とした涙の分だけ笑顔をつくろうと思った
朝目覚め風を入れたら自然に笑顔がつくれた
風におはようと声してみた

「再会」

障害者の交流会

二十二年ぶりに友に会う
友は両耳が聞こえない
友は明るく自分の人生を歩いていた
幼稚園での出来事を思い出す
プールで思いっきりはしゃいだ私達
補聴器に水を入れて壊してしまった
泣きじゃくる友
先生に叱られる私
三十八年も前の出来事
確りと覚えている
友は明るく自分を歩いている
私は自分を嘆いている
何て大きな違いだろう
友との再会で心の窓を開けることができた
風が流れ込んで来て教えてくれた
自分を歩こう
自分の人生を歩こう
友と抱きあったとき二人の心臓の鼓動が拍手に
なった
先日、何年かぶりに堀江さんと会った。日々の心に
浮んだ言葉を、文章にしなくてかまわないので、言
葉にたくさん落してい(く)ことをお奨めした。
厭な幻聴が来たら、すぐさまメモ帳に「今日の幻聴
は美しくなかった」等と言葉におとししてみると、気
持ちが幻聴から一歩離れることができるのではな
いかと思う、と話したのであるが、言葉に落すこと
で自分を客観視できるだろう(っ)と思う。

《一寸一言・もう一言》

一寸一言 II

祇園精舎のこと

打田昇三

平家物語が「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり…」から始まることは知れ渡っている。しかし、此の精密機械工場のような名前の場所だか施設だが何処にあるか？と聞かれても直ぐには答えられない。正確には祇園精舎は既に無くなっていて、現地には祇園精舎の跡だけが遺跡公園として残されているからである。其処には一九八九年に日本の関西大学から調査隊が行って浴場の跡などを発掘している。

その場所はインドのガンジス河（支流）の上流、ネパールとの国境に近いバルランプールという町の郊外になる。祇園精舎に行くには、先ず成田からインドの首都・デリーまで飛び、デリーから鉄道で北インドの主要都市ウッタラプラデッシュ州都ラクナウまで行く。インドは世界有数規模の鉄道王国らしく年代モノの機関車でも時速百五十キロは出せるらしい。都市部を離れると巨大な太陽が輝く果てしない平原、農村集落が続く中を走ること六時間半、人口七〇万のラクナウ駅に着く。

此の都市は一八五七年に起こった大規模な反乱（反英暴動^{セポイの反乱}）の中心地で民族意識が強いとされるから異邦人は静かに通過する。

しかし此処から目的地までは未だ二百キロ以上もあり鉄道は一日一本なので余程、運が良くないと乗れない。街道筋には「小屋」と呼ぶにも抵抗があるような超簡単な施設？が並んでいて食べ物などを売っているが蠅や蚊が飛び交っているから度胸が良くないと口には出来ない。「トイレ」が無

いので男女を問わず人目を避けて道路脇の空き地利用になるが人口が多いから交通は頻繁である。

祇園精舎の遺跡は都市部から少し離れている。聖地を訪れる者は隣のバルランプールに宿泊するのだが、此の町にはイスラム教徒なども多い。インドも仏教国では無くなった。祇園精舎こと現地名「シユラバステイ」はバルランプールから八キロ程離れた森林地帯にあり中心地の五百メートル×二百五十メートルが発掘整備され祇園精舎遺跡公園として一般に公開されているのである。

八十余歳で入滅する迄の釈迦は山中での苦行六年、修行を兼ねた説法行脚四十五年の割合で過ぎたとされるが、雨期に修行（雨安居）をする場所が必要である。此の土地は当時の太子ジェーダが持っていた園林であった。長者スダッタは釈迦の為に園林を買おうとした。貪欲な太子は「金貨を敷き詰めた範囲を売る」と言った。長者は言われる俚に金貨を敷き詰めて広大な用地を買収し、其処に祇園精舎を建て釈迦を迎え入れたという。死後にスダッタは極楽往生し、太子は地獄に落ちたと思うが二人の消息は伝わっていない。

釈迦の死後にインドは王国の乱立が続き、紀元前三三〇年にはアレキサンダーのインド侵攻があった。是を撃退したのが古代インド最初の統一帝国とされるマウリア王朝である。第三代のアショーカ王は衰えかけた仏教を再生した。皮肉な事にアレキサンダーが齎したヘレニズム文化によって精神的要素が主の仏教に仏塔の建立や仏像彫刻、仏教美術などが取り入れられるようになる。尤もアレキサンダーは先ずギリシアのコインに自分の肖像を刻ませたというから、英雄の自己顕示が先であり、死者が対象の仏像が出来るまでには長い

年月が必要であったろう。シルクロード交易で活躍した遊牧系民族「クシャーン王朝」（ガンダーラ美術に貢献）が最初だと言われる。

怨讐（おんしゅう）を克服せよ

菅原茂美

恨み心をいつまで持ち続けても、何にも残らない。自分を惨めにするだけである。日本は韓国に戦争賠償の意味で多額の政府開発援助（ODA）を支払い、1965年賠償はすべて完了。今後一切賠償請求はしないと、日韓条約を締結した。

しかし、確かに地下鉄や高速道路など日本の援助で構築されたが、賠償の意味で支払ったODAの恩恵は、必ずしも一般国民に行き渡らず、新聞解説によると、政府高官などが懐にした額は多額であったとも言われる。その噂を打ち消す為に、政府は躍起になって日本叩きを始めたとも言われる。中国に関しても全く同じ事であると言われる。

さてヨーロッパで第2次世界大戦中、ナチスドイツがフランスのオラドゥール村で大量殺戮（犠牲者642人）を起こすなど、言語に絶する惨劇を演じたが、戦後フランスは怨みのあまりドイツを永久敵視する事はなかったという。寛容の精神で：などと言われたが、実は米ソの冷戦が始まり、ベルリンが東西真つ二つに分割され、ドイツがソヴィエット側に傾く事のないようアメリカのテコ入れで、フランスがドイツを断罪するより、和解の道強いからだとされる。

⁸⁹年ベルリンの壁が崩壊してドイツが統一しても、フランスには、わだかまりは残ったが、NATOが結成され、今、ヨーロッパの統一貨幣ユ

ーロが流通し、ヨーロッパ統一の夢に向かって推
進中である。中韓も恨みは簡単に消えるものでは
なかるうが、明るい未来を築くため、寛容の精神
で一步前進してほしい。

〓もう一言、いやもう二言〓

神事と合戦

打田昇三

室町時代中期の應永年間（諸説あり、一四二〇年代か
）六月、石岡城では青屋神社の祭礼が行われて
いた。此の神事は、藤原氏の氏神であった鹿島神
宮から奈良の春日大社を分祀する際に奈良の人々
が手近に在った青物を供え三輪素麺で会食したの
が起源なのか、或いは神殿建築が間に合わず青薄
や葦で屋根を葺いたのが名称の起りであるのか
諸説がある。昔の事は見た者がいない。

祭神は「彦波瀲武鸕尊不合尊（ひこなきさたけうがや
ふきあえずのみこと）……此の神様だと「屋根未完説」
が合致する。神話では神武天皇の父親とされてお
り、大和朝廷の祖先が大陸から逃げて来たことを
暗示する伝説を持つ神である。

常陸国では、かつて都から来た国司が常陸国内
の一の宮である鹿島神宮、二の宮（鹿神社）、三の宮
（吉田神社）……と順に参拝する義務があった。鹿島
へは高浜から船で行ったと思われるが、天候不順
で運行中止になった場合は、高浜に仮屋を設けて
拝礼を済ませた。その際に三輪の神事を真似て青
屋神社を祀ったようだが、常陸国は国守が親王と
決められた為に貰うものだけ貰って現地に來なく
なり、折角の青屋神社も府中城（石岡）の片隅に置
かれて城主の大掾（たいじょう）氏一族だけが寂しく

行う神事になっていたのであろう。

話を戻して、城主の大掾満幹が餛飩だか素麺だ
かを食べようとした時に、物見櫓の上で警備に当
っていた武士が「早馬が参ります！」と叫んだ。
満幹は麵類を喉に詰まらせそうになったが見張りの
報告に反応して「何事ぞ！」と立ち上がった。
息も絶え絶えに駆け込んで来た伝令は「江戸但馬
守が押し寄せて参りました！」と言うのがやつと
で気絶した。此の時に水戸城は攻め取られて江戸
氏の城になった。以来、桓武平氏の血を引く名門
の大掾氏は僅かに府中城近辺だけの弱少大名に成
り下がってしまった。水戸市史に依れば敵の勢力
は二十人足らずであつたらしいから、是はどう考
えても城主・大掾満幹の大失策である。

水戸城は鎌倉の足利持氏から「江戸氏に渡すよ
うに！」言われていたのを満幹が無視していたの
であるから攻め取られても仕方が無い。なぜ取ら
れるのか？と言えば、その前に起きた「難台山事
件」などの対応が悪かったからである。鎌倉の命
令を無視して水戸を手放さない大掾氏にシビレを
切らした江戸氏が実力で奪いに來たのである。

城主の大掾満幹が青屋祭で府中城に行くことを
知った江戸但馬守は部下を連れて暗闇の千波湖に
潜んでいたと伝えられる。「喰うか、喰われるか」
の戦国時代に、城を離れて餛飩を食べているのと
水中で突入のチャンスを狙っているのでは大違
いである。大掾満幹は直ちに水戸へ向かったけれ
ども全ては後の祭り：水戸城から逃れて來た家臣
に途中で出会ったが、江戸勢が追ってくるから
状況報告を聞いている暇もない。警戒しながら府
中城まで逃げ込むのが精一杯である。
新編常陸国誌によると江戸氏は平将門を討った

藤原秀郷系で那珂川流域に土着した小豪族らしく
水戸城を得てからは佐竹に狙われ続け、やがて水
戸城も取られたらしい。南北朝時代には南朝に尽
くしていたことで知られる。

戦国時代末期、府中城（石岡）に居た大掾氏が
滅びたのが天正十八年で、江戸氏は其の前年に滅
びているから、両家の戦いでは結果的に大掾氏が
勝つたと思えば水戸城の負けも諦めがつく。

マルタの墓標

打田昇三

イタリア半島は長靴のように地中海に伸びてい
るが、そのつまさきにシチリア島があり更に其の
南方約九十キロには地図にも載らない様な小さな
島が三つある。（国土面積は小豆島の二倍ほど）

人口は四十万ぐらいだと思いが、一つの島など
は数人しか住んで居ない。それでも共和国であり、
主島マルタに在る首都のバレッタは十字軍に参加
したヨハネ騎士団が築いた要塞都市として世界遺
産に登録されている。

日本には、マルタ共和国の大使館も公使館も無
いが、渡航手続きなどは東京の何処かで個人的に
実施してくれるらしいから行くのは簡単であるが
マルタ行きは航空便はシチリア島か、或いはロー
マから出ているようなので、イタリア経由でしか
便は無いのかも知れない。空港はあるが、此の国
には鉄道も橋も山も川も湖水も無いのである。

しかしながら一九八九年の暮にはバレッタの港
外に停泊したソ連の客船で米国のブッシュ（先代）
大統領と、ソ連のゴルバチョフ最高会議議長（当時）
が会談して、いわゆる東西の冷戦が終結したので

あるから世界的には大きな意義を持つ。それを記念する高さ約六メートルの記念碑が主島南東に建てられていると言う。

それともう一つ、此の国(島)に在るイギリス軍共同墓地には、第一次世界大戦下で市民の安全維持に貢献した日本海軍の犠牲者(戦没者)七十余人が眠っており、其の記念碑が建てられているのが日本からは離れ過ぎていたこともあって、余り知られていない。近年に欧州訪問の皇太子だか皇族だかが寄つたような気もするが…。

大正六年(一九一七)、第一次世界大戦ではドイツの潜水艦が地中海周辺に出没して商船などに無差別攻撃を加えた。このため食糧危機に瀕したイギリスは「日英同盟」を楯に軍事支援を要請した。是に基づき日本は護衛艦隊(第一特務艦隊)を地中海に派遣し、マルセイユとアレキサンドリア間でイギリス・フランスなど延べ七八八隻の輸送船(七〇万人の兵員)を護送し「地中海の守護神」と賞讃されたという。その任務中に大正六年六月十一日、駆逐艦「榊」が地中海でドイツ潜水艦の魚雷攻撃を受け、艦長以下五十九名が戦死して、さらに現地で戦病死者十数名が出た。

このうち故国に帰還できた遺骨は五柱だけで、残る七十一柱はマルタ島の英国軍墓地に埋葬されており現在も其処に眠っているのである。当時のマルタは英国領であった。日本の護衛艦隊は一九一九年(大正八年)四月に任務を終えて帰国した。現地では感謝を込めて盛大な送別の式典が行われたと言う。現在でも「日本海軍マルタ艦隊」の評価は高いようである。

「縮小社会」でもよい

菅原茂美

少子高齢化・人口減少・経済停滞。以前の右肩上がりの目覚ましい経済発展で、活気に満ちた時代から見ると、現在は縮小社会で、些か寂しい感じはあるが、そんなに悲嘆にくれる必要はない。

グローバル化時代で、競争原理・市場原理が世を支配し、人々の心は荒んでいる。富は一部に集中し、一般市民は蚊帳の外。企業は利益追求に血眼。超一流の会社でさえ、経理をごまかしたりしている。利益が上がれば、莫大な社内留保を蓄え、労働者への還元は微々たるもの。うつ病や過労死が多発。これでは若い世代が、張り切つて子供を沢山産む「下地」など整っていない。

どうして世界は、何が何でも貿易の自由化をしなければならぬのか？TPPの論理は、統一ルールで、全ての国が貿易を活性化するというが？そのため例えば日米では自動車部品・農産物などで、失業する人が多数発生する可能性があり、双方で市民が反対デモを繰り返している。日本は米が有り余っているのに尚も輸入しなければならぬ。アメリカの余剰農産物のゴミ捨て場ではない。こんな世界情勢の濁流から逃れ、静かな山村にイターン・Uターンして、ささやかに芸術製作や農牧畜に励む人々がいる。新しい交流の輪も広がり、新たな文化が生まれる。人口分散こそ最重要課題だ。大都会に人口の極集中をもたらした弊害は、長年政府の無策の果てだ。首都移転なり、道州制導入などで、人口の平均化を図れば、縮小社会などと嘆いている暇などないはずだ。経済発展に目がくらみ、環境破壊の強烈な反省が先ず必要。それから再出発すれば、成熟社会と言える。

文明開発は動物が先！

菅原茂美

8月号で急速な近代化は、人類に幸せをもたらさないと書いた。コンクリートジャングル、交通機関の高速化、武器の高性能化。ゴミばかり増え、環境は汚染し、資源は枯渇する。その果ては人類の退化？…と。それに対し、動物は、合理的に生活のノウハウを改善・進化させ、環境の変化や天敵から逃れる術を開発してきた。

葉切りアリ(ハルソルアリともいう)の菌糸栽培。私は熱帯でその行列を見てきたが、何万匹ものアリが、親指の爪大に切り取ったトローモロコシの葉をセッセと巣穴に運ぶ。室では葉が醗酵し、菌糸(カビ)が栽培され、それが食糧だという。

人類の食糧用のトローモロコシは、骨ガラが残るのみ。人類より先に農業を行っていた事になる。シヤクトリムシの木の枝に似せた擬態。カブトムシは角の大きさをオス同士が出食わしても、命がけの戦いはせず、小さい方は逃げ、無駄なエネルギーは消費しない。

人類が最後に枝分かれしたボノボは、群れと群れが互いに衝突し合うようになると、互いに若いメスを差し出し、相手方のボスを慰安する。すると何事もなかったかのごとく双方は、平穏に分かれる。

すぐ殺し合いをする人類は見習うべきである。光を反射しないガの目の構造に倣った液晶テレビのパネルや、甲虫の薄羽根の畳み方は人工衛星の搭載物に応用するなど、動物から多くを学ぶ事ができる。そしてメスに餌をプレゼントするハエや、またある種の蝶は交尾したメスに粘液で貞操

帯を作るといふ。人類もこれを真似すれば、余計な心配をしなくて済む。

打田兄、菅原兄の「もつ一言」文が今月は一言文になりました。函兄、文章に自分を紡ぐことの面白さ、大切さをよく理解されており、毎月数本の原稿を届けられます。

今回は、紙面に余裕もあることなので「もつ一言」にしてみました。特に決め事はないので、ちよつと十言なんてことがあっても面白いだろつと思つている。「二百字程度の投稿でもOKです」ので、皆さまからの投稿をお待ちしております。毎月、二十五日をメ切に、翌月号に掲載させて頂きます。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻三（二一―一）

「当たるも八卦当たらぬも八卦」と言うが良く考えると此の言葉ほど無責任なものはない。誰でも宝籤と同じで当たって貰いたいから占い（うらない）を頼むのである。当たらなかった場合は只の時間潰しになる。尤も此の諺は「卜占の結果は気にするな」という意味らしいのだが、それならば最初から占いなどしなれば良い。そうは言っても人間は誰でも未来を知りたいから「根拠が無い」と分かっているながら、不安が有れば卜占などに頼ることになるのである。

文明科学が驚異的に進歩した現代でも、街頭の占い師が商売として成り立っているのであるから是が

江戸時代、織豊・戦国時代、室町時代、鎌倉時代から平安時代と遡って行くほど、本当にそうなのか疑問はあるが、神仏の意向を代弁するような卜占の権威は他に頼るものがないから重視されていたことであるかと納得するしかない。

日本の官職制度は氏族制に発祥して先ず「大化の改新」の前から中国の制度が少しづつ導入？され、それを天智天皇と文武天皇（天智天皇と天武天皇の孫）が制度化したようで「律令（りつりょう）」という形で決められた。俗に「八省百官」と呼ばれた役人どもの塊（かたまり）である。これが民主国家と言われながら本質が全く変わっていない現代の官庁に受け継がれているから、言うことだけは立派でも中身が平安時代のような政治がかつての大日本低国時代（大日本帝国とも言う）並みに堂々といわれているような気がする。

当時の中央官庁である八省百官の中で序列のトップに置かれたのは神祇官（じんぎかん）である。神の祭祀を司り全国の神官を支配していた。この役所のことは北畠親房が書いたという有職故実書（ゆうそくこじつしよ）古来からの典礼の規範である「職原鈔（しよくげんしよう）」にも「当官を以て諸官の上に置く、これ神国の風儀にして天神地祇を重んずる故なり」とあるらしい。

神祇官の長である「伯（はく）」の下には和菓子と間違ふような名称の「大福」以下、多くの階級が在つて一番下に置かれたのが「卜部（うらべ）」であり実際の占いは此の連中が担当した。仕事だけ押し付けられて身分が下つ端であるからマトモな占いなど出来る筈が無いような気がする。

平家物語、前章段の「（つじかぜ）」では京都の町なかを竜巻が通り抜け人家はもとより、人命も多く

失われた。それを神祇官及び陰陽寮に占わせた……とある。神祇官の占い師とは別に陰陽寮にも易者がいたような表現であるが、こちらの方は官庁内に神社を祀つていて、その御託宣を伺つたらしい。どちらか言うとう星の動きを観察して天文と暦を管轄していた。職員も博士が中心である。

京麿に（竜巻）が起こり大きな被害があったのは、平家物語では話の都合上、治承三年（一一七九）のこととしているけれども史実は翌年のことらしい。時の政府は、それを「占い屋」に判定させたのである。災害が起きる前に預言するならば意味があるけれども起きてからならば子供でも当てられる。かつて阪神淡路大震災の後で専門家があれこれと意見を述べたのを褒めた「起きてから理論が冴える地震学」という名（迷）句がある。

京都の竜巻では「大臣など、偉い人たちが身分を弁（わきま）えて行動しないと、大事件が起こり、仏教も皇室も滅ぶ！」という御託宣が出た。暗に平家を批判している内容であるから神様の意見と言うより、平家の専横に困惑していた神祇官や占い師の切実な意思表示と見たほうが良い。冷静に考えれば神仏が御自分の意志を言葉に出して言うことは出来なから、それを仲介する神官・僧侶・占卜者などが思い付いた言葉で再生するしかない。勉強不足の仲介人だと神仏の真意もスーパーの広告程度にしかなえられない懼れがある。

次の章段は大病院で難病の治療対策を検討しているような題名であるけれども、実は平重盛が竜巻など天変地異の発生原因を父親（清盛）の強引な政治手法による因果だと憶測して悩み、挙句の果てに死を願う……という悲壮な筋書きである。

暴風雨や竜巻などの災害は、立派な政治が行われ

ている(と当事者が思っている)現代でも起こるから、重盛は気にする必要も無かったように思うが平家物語の作者は、清盛の悪を強調するため重盛を「考える人」にしたのであろう。

医師問答(いしもんどう)のこと

年次的に言うると此の話の時代、つまり平重盛が病死したのは治承三年であり翌年には源頼朝の伊豆幸兵がある。平家も頂点を過ぎて株価は下がる一方なのであるから、平重盛も死に急ぐ必要は無かったように思うけれども、是まで長いこと坊主たちの話で退屈させてきた平家物語が徐々にではあるが、ようやくにして「戦記文学」らしい内容になってくるのである。ただし相も変わらずサービズとして古代中国の話が少し付いている。

小松の大臣(こまつのおとと)と呼ばれていた内大臣の平重盛は、父親の暴走を憂慮する余り、京都の竜巻被害に対する古い屋たちの根拠のない推測を聞いて何となく心細くなり、日頃から平家が崇拜している熊野神社への参詣を思い立った。熊野へ行って先ず本宮の神殿である証誠殿(しょうじょうでん)に夜通し籠ってお参りした。此処は神殿と言っても熊野権現の本地仏である証誠大菩薩が祀られている。重盛が、その場で朝から晩まで神仏に願ったのは次のようなことである。

「我が父親である入道相国(出家した太政大臣)の近頃の言動を見ますと、道に外れた悪逆なことが多く、そのことが君(法皇、天皇)を悩まし奉っております。この重盛は嫡男でありますから、折りに触れて父を諫めてはいるのですが、不肖の息子の言うことは聞

いて貰えません。このような状態が続けば父(清盛)一代でさえ、平家の栄華が危うくなり、父親の名を後世に残すことはもとより平家一族が繁栄することが出来なくなりそうです。そこで不肖の身をもって重盛が思いますのは、無理に重臣の地位に列して没落するようなことは忠臣・孝子の道にあらず、現世を逃れ隠棲して死後の菩提(往生)を願うことこそ自分に相応しいと。然しながら、現世の煩惱にとらわれていて果報の劣った自分は、思い切つて出家する覚悟も出来ておりません。どうか、熊野権現・金剛童子様、私の願望をお聞き届け下さり、子孫が繁栄して朝廷に對し御奉公が出来ますように、それには入道(父親)の悪心を和らげて天下が平穩になりますように、お願いを申し上げます。もし、平家の繁栄が父(清盛)の一代で終わり後の世に恥じを残すようなことになるのであれば此の重盛の寿命を縮めて平家が受ける来世の苦しみを助け給え。どうか、私が願う二つのことに神仏のお助けが頂けますように……」

平家以外の者にはどうでも良い様な勝手な願望ではあるけれども、平重盛が悲壮な決意で祈願したので熊野権現も仕方なく聞き届けることにして祈願者の重盛の身体から灯籠の火のようなものが発するのが見えた。是を大勢の者が目撃したのだが誰も怪しんでいて、本人には言えずにいた。

熊野へ行く途中には岩田川(現在では富田川)がある。参詣祈願を終えての帰路に平重盛の一行が川を渡った。その際には、重盛も同じで有ったと思うが嫡男の権亮少将維盛(ごんのすけしょうしょう・これもり)以下の若殿たちは、寺社参拝用の浄衣を着用し、その下に薄い色の絹物を着ていた。権亮少将というのは「御産」のことで登場した平重衡の役職のすぐ下位の職である。

夏のことであるから若者たちは緩やかな川を渡る際に何となく水を掻くような動作をしながら馬を進めていた。その為に浄衣が濡れ下着の絹物の色が変つて喪服の様な色合いに見えてきた。これを近臣の筑後守貞能が見咎(とが)めて「これは何としたことか、若君がたの浄衣が喪服のように見えませぬ。すぐに着替えて頂くように致します」

といったのだが重盛はなぜか嬉しそうな顔をして「是は我が願いが神仏に通じ成就したのである。着替えさせてはならない……」と言い、直ちに川辺から熊野へ喜び(感謝)の幣帛(へいはく)を奉納する使者を立てられた。事情を知らない者たちは重盛の行動を怪しみ、なぜ喪服のような色の着衣を其の俣にさせたのか本意が分からなかった。

通常の場合、神仏に祈願する内容は病氣平癒とか前向きな願望成就であるけれども、平重盛は自分の死を望んでいたので神様も仏様も戸惑った。

しかし祈願者が真剣に望んでいる以上は其れを叶えてやるのが「御利益」の本筋であり、願われる立場から言えば、寿命を延ばす願望よりも短くするほうが簡単である。神仏は少し考えてから特例として重盛を病気にしてくれた。熊野参詣から帰った平重盛は幾日も経たずに床に伏す身となり本人も真面目に努力?して病院にも行かず薬も飲もうとしなかった。原本に「祈禱も致されず」とあるが祈禱などではなく、しなくても同じである。

その頃、中国(宋の国)から名医と評判の有る医師が日本に来ていたので、心配をした平清盛は神戸の別邸から越中守盛俊を使者として「この名医の診察を受けるように……」伝えてきた。盛俊は巻二「烽火之沙汰」に登場した重盛の側近・主馬判官盛国の子である。折角、神仏にお願いをして病氣になったの

に「余計な事をする！」と思つたのだが、正式な父親の使者ともなれば追いつ返す訳にもいかず重盛は病床上に盛俊を呼び、介護の者に助け起こされて次のように言つたのである。

「先ず、病院に行け！」と言われた父上のお言葉は有難く承ります(と申し上げておいて欲しい)然しながら、盛俊に聞いて貰いたいことがある。かつて醍醐天皇(菅原道真を登用し、そして左遷した天皇)は賢明と言われたけれども、高麗国の占い師を宮中に招いたことがあり、それが末代までの誤りとされ、中には日本の恥だ！という者もいる。ましてや此の重盛ほどの凡人が異国の医師を王城の地である此の京都に入れる(診察を受ける)などということは国家の恥ではないか。異国の例でも、漢の高祖(前漢の初代皇帝・劉邦)は三尺(一メートル弱)の剣をひっつけて天下を治めた豪傑であつたけれども、謀反を企てた淮南(わいなん)揚子江以北の英布(反逆者の名前)を攻めた際に流れ矢で負傷し更に病氣にかかった。皇后の呂太后が名医と評判の者を選んで診察させると、「この傷を治すけれども、謝礼に黄金五十斤(三十キログラム)が欲しい」と言つた。それを聞いた高祖は「私が天に守られて戦つていた頃は合戦で傷を受けても痛みを感じなかつた(しかし今は痛みを感じている)これは自分の武運が尽きた証拠である。人間の寿命は天が決めることであり変えることは出来ない。したがつて、この傷を癒えさせることは扁鵲(へんじやく)古代の伝説的な名医でも無理であろう(治療は受けない)そうかと言つて、金を惜しんで医者拒んだと言われるのも嫌だ！」と、黄金五十斤を払つてから診療を拒否した…と伝えられる。そう言う話は先人の心意気を伝える言葉として私の耳に残つており、私は感心した。この重盛は不肖の身を以て(その任ではないのに)公卿に列して三

台に昇ることが出来た。(三台は太政大臣、左・右大臣を三台と言つた。内大臣は定数外の大臣であるが同格とされた。当時の重盛は内大臣)人間の運命は、自分の意思では無く天が決めるものである。それなのに、天の意思に反して治らない病氣を治療しようとするほど無駄なことはない。私の病氣が前世の因縁で治らない業病で有つた場合には幾ら治療しても悪化するであろうし、それが現世の災厄によるものならば治療をしなくても自然に治ることが出来る。その昔、釈迦は菩提河(ぼつたいが)の畔で入滅されたがそれを予言された。ご自分の病氣が、古代インドの名医と言われた耆婆(ぎば)でも治すことの出来ないものであることをお示しになられたからである。是が医療で治せるものであつたならば、どうして釈迦が死(入滅)を予言されたりなさるものか。この様に自分の身に起こつた宿命的な病氣を治療することは不可能なのである。古代の名医であつた耆婆が、仏である釈迦の病氣を治せなかつたのに、仏体でも無いこの重盛の病氣を宋だか象だか知らないが他国の医師に治せる筈が無い。たとい其の医師が素問経、大素経、難経、明堂経という中国に伝わる四部の古代医学書を参考にしても多くの治療を手掛けていた名医だとしても、どうして此の世に生きる罪に穢(けが)れた此の身の病いを治せようか。前世の業病を治療することが出来るか。さらにまた、もし異国の医師の治療で命を長らえた場合には、日本の医師が治せなかつたこと(日本には良い医師が無かつたことを証明すること)になる。どうして、その様なことが出来るであろうか。私には医療が必要では無いから、会う必要も無い。まして我が国の大臣としての立場で、軽々しく異国人に会うなどということは国の恥であり国家衰亡の証しである。たとい此の重盛の命が無くなろうとも国の恥と

なることをする気持ちは無い。此の事を(清盛公に)申し上げるがよい！」とその様に言われたのである。使者として来た越中守盛俊は早速、福原(平家別邸)に帰つて其の事を清盛に報告したのだが、小難しいことを長々と言い聞かされたからとても全部は覚え切れない。忘れてしまつた部分を涙で誤魔化して最後の方を重点的に報告した。聞いた清盛は、内容は兎も角、医者を拒否されたことは分かつたので、仕方なく「是ほど、国の恥を思う大臣は、昔にも聞いたことが無い…まして是からもそういう立派な人物は出ないであろう。此の国には勿体ないような大臣が覚悟したことであるから、これは諦めるほかはない！」と妙な感心をして不本意ながら泣く泣く都へ戻つたのである。

ここで原本の次の条文には「同七月二十八日」とあるが話が断続的で年次が前後しているようなので整理してみると、平家打倒の陰謀が露見して関係者が処分されたのが治承元年であり、島流しにされた藤原成経らが赦免されたのが治承二年で、この年の暮には安徳天皇が生まれている。そして巻二にある「善光寺火災」は記録で治承三年(一一七九)になつており、平重盛の熊野行きも同年である。京都が竜巻襲やられた「(つじかぜ)」の話は先に述べたように治承四年のことらしいので重盛が責任を感じる必要は無かつたのだが平家物語の作者は無理に重盛の所為にした。

無常感に取り付かれた平重盛は病名もハッキリしないままで病床に伏す身となり、治承三年六月二十一日には後白河法皇が見舞いに来た。そして平家物語原本にあるように七月二十八日には仏門に入り「淨蓮(じょうれん)」という法名を貰つたのである。そして八月一日には四十二歳で本物の仏様になつて

しまった。平家物語ではサービスして享年四十三歳にしてある。原文に「世は盛りと見えつるに、哀れなりし事共なり」とある。

父親の入道相国清盛が横紙破りの権力乱用を繰り返していた中で、重盛がそれを抑えてくれていたから世の中も落ち着いていたけれども、この後は（重盛の亡き後は）どの様な事になるのであろうかと都の人々は嘆き合っていたのである。それに反して重盛の異母弟である前右大将の宗盛を取り巻く連中は「これで（平家権力の中心が）宗盛公のものになる！」と軽率に喜んでいた。

親が子を思う心は愚かな子が先立っても悲しいことであるのに此の度は当家の棟梁に譬（たと）えられたる当代の賢人の死であるから親族による恩愛の別れはもとより平家の衰微に与える影響など悲しんでもなお余りあるものがあつた。其の様なことであるから時代は忠臣と言われる人を失い、平家としては優れた指導者を失うことになり武門の弱体化（による世代の混乱）が案じられる。

多くの者に惜しまれたように平重盛という大臣は容姿端麗、品格高貴、威儀厳正、言語分明など適当な四字熟語に全て当てはまるようなお方であり、朝廷に対して忠義心が厚く（国民に対してはどうか分らないが）才能があり、技芸に優れていて徳があり、正に行一致の人材であつた。

是だけ褒められれば言うことは無いが次の章段「無文」も平重盛に関わる話である。父親の清盛を悪者にするために暴走のブレーキ役を務めた重盛を必要以上に美化したような節があるのだが、平家株の暴落が徐々に始まることは間違いない。

灯炉之沙汰（とうろのさた）のこと

此の章段は極めて短い。題名は「灯炉」であるが本文では「灯籠」になっており話が照明器具のことであるから節電対策で短くしたのかどうか：内容が違ふ為に分けたと思うが「無文」に入れても良いよなもの、平重盛の話題ではあるが、良く見ると仏教の宣伝であつて、そのことから仏教の中でも念仏遊行を主とする時宗（じしゅう）とか浄土宗の関係を考証する学者も多い。

思い出して見れば、此の大臣は現世の罪を滅ぼして後生の為に善行を積もうとする志が深く、（自分が来世で悪の道に溺れるか、或いは浄土に置いて往生を遂げることが出来るか心配の余り東山の麓に柱と柱の間が四十八在る寺院を建立し一間に一個ずつの灯籠、つまり四十八間に四十八基の灯籠をぶら下げた。その為に九段階ある蓮華の台（上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生）が目の前で輝き、その様は光耀鸞鏡（こうようらんけい）鳳凰を彫刻した豪華な鏡を磨き上げて光り輝くようであつて、極楽浄土が身近に在るよう感じられたのである。

毎月十四日、十五日を選んで灯籠に火が灯されたから、其の日になると当家はもとより、他家からも一応は美人と言われた若い女性（女房）を集めて、一間に六人ずつ四十八間で合計二百八十八人を揃え時間を決めて一心不乱に読経をさせた。源平盛衰記では年齢制限があつて十六歳から二十歳までとなつてゐる。念仏が終れば今様（流行歌）を歌わせたとも書いてある。そうなると思ふと信仰心とは全く関係の無い悪趣味のように思える。

平家物語を信用すれば「彼の両日間是一心不乱の

念仏が絶えず、臨終に際し仏に迎えて貰い極楽へ行く、という悲願も此の所に神仏が仮の姿で現れて叶えられる。阿弥陀仏の慈悲の光も此の大臣を照らして下さるであろう」ということになる。行事二日目の十五日には、結願として多人数に依る念仏（融通念仏）が行われ、大臣（重盛）自らが行列に混じつて西方に向かい「南無極楽浄土の教主、阿弥陀如来、三界六道（三界は欲・色・無色の各界、六道は天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄の各道）の衆生を普く（あまねく）全て）濟度（救い）給へ」と、修めた功德による極楽往生の願いを発したから、是を見る者は慈悲の心を起こし、話を聞く者は感激の涙を流した。その事から此の大臣は「灯籠大臣」と呼ばれたのである。

打田昇三兄の、私本平家物語は、現在巻第十一の三分の一まで進んでいる。十月の初めには完結を迎える。そこで、私本平家物語の完結記念を兼ねて、石岡市、街角情報センターで十一月三日〜八日に風の会作品展を開く事になりました。詳しくは、来月にお知らせいたしますが、昨年の風の会100号展にまごめた「それぞれの100号」をはじめ、物語毎にまごめた小冊子、兼平智恵子姉の風の言葉絵などを展示販売いたします。ご期待ください。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>